
それはしてはいけない事だったんだよ

秋月 実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それはしてはいけない事だったんだよ

【Nコード】

N7113U

【作者名】

秋月 実

【あらすじ】

サーデイスは魔法と召喚術の世界に転生する。望みは一つ。現代に戻りたい。だからサーデイスは、まず使い魔を元の世界に帰す研究を始めた。サーデイスは気付かない。それは、世界を揺るがす途方も無い事だという事に。

暗い話です。破滅へと一直線な話になる予定なので、ご注意ください。

ARCADIAでも連載開始しました。

ブローグ　く神と邪神に祝福されし神子く

真つ暗やみの中、綺麗な女の人があった。

「貴方を祝福しましょう。希代の聖人よ」

真つ暗やみの中、格好良い男の人が言った。

「貴様を祝福してやろう、希代の罪人よ」

称えよ、称えよ。彼の者を称えよ。

この者は我らが祝福せし神子である。

怒号。

憎しみ。歓声。それは祈り。それは絶望。

怖くなった俺は、逃げ出した。

走って、走って、その果てにあるのは……。

何か、嫌な夢を見た気がする。俺は眠い目を擦り、起き上って服を着替えた。

窓を開けると、ゆったりと空を飛ぶ竜騎士や、馬車を引っ張る魔物が見える。

俺の名はサーデイス。魔法と召喚術の世界の、宮廷魔術師の息子である。妾で、第二子だけど。そして、科学の進んだ世界からの転生者。

召喚術の事故で魂だけ呼び出され、偶然胎児に宿れたのは僥倖だった。

乗っ取る形になってしまった胎児には申し訳ないが……。宮廷魔術師である、父アルフォンスも俺を殺しているので、お互い様だと思っ
てほしい。

今日は、兄貴のバルガスの初召喚の日だ。召喚を見るのは初めてなので、胸が高鳴る。

軽く身だしなみをチェックして、心を切りかえると、部屋を出た。男女の笑い声が、聞こえた気がした。

1話 最初の実験

「ぎゃあああああぐうあああああ」

ドン引きなんですけど。

「あああああああぐううううううう!!」

マジドン引きなんですけど。

今、俺は腹違いの兄貴、バルガスの召喚術を見ている。
どでかい狼みたいな魔物さんなんだけど、魔法陣の中でめっちゃ
苦しんでいます。

しばらくして、兄貴が呪文を唱え終わりました。
魔法陣が解けて、狼がやってくる。

「よしよし、いい子だな」

兄貴が狼の頭を撫でる。その瞳はがらんとつの人形のような。
何それ怖い。

「素晴らしいぞ、バルガス。サーデイスも見習うが良い」

「はい、父上様」

キラキラした瞳で言うておく。いい加減、この世界での処世術は
覚えて来た。

この世界では、身分や序列がテラ厳しい。尻尾を振っておくに、
越した事はないのだ。

例え、目の前で拉致・洗脳が行われていたとしても。

ここでは、誰もが召喚術を使える。

召喚術とは、異世界から、魔物を召喚して、思う通りに動かす術である。

つまり、拉致・洗脳なんじゃないかと予想していたが、それは見事に確定された。

正直言って、俺はあの時死んで良かったんじゃないかと思う。

何故なら、俺が生きて召喚されていた場合、どの道洗脳された後に役立たずとして殺されていただろうからだ。

ならば、第二の人生を送れている今の方がずっとましだという物だろう。

実を言くと、俺は元の世界に戻る事を諦めていない。

召喚が出来るなら、その逆もしかり。

元から色々実験してみるつもりだったが、実際の召喚を見て改めて思った。俺は、加害者にはなりたくはないのだ。胎児を殺した事のある俺に言えた義理ではないのだけれど。

俺が召喚術を使えるようになるまで、後二年ある。

人前で召喚するわけにはいかないから、父が俺に召喚させようと思っ前。

実質一年かな。

父が宮廷魔術師だ。研究資料はいっぱいあるのだし、精々頑張ろう。

それから一年。魔法陣の中で、狼が唸っている。それは兄貴の狼と同じ種類のようだった。

とりあえず、言う事を聞かせる呪文を抜いてみた。

当然、狼は俺に敵意を示している。なんとかして、狼とコミュニケーションをとりたい。

一応、テレパシーを発する魔法具は用意してあるのだが、どうやって狼相手に使わせるのかという問題が生じた。

どうするか悩んでいると、唸る狼が人の形をとったので、俺

は目を丸くする。

『——！』

もちろん、何と言っているかはわからない。俺は魔法陣の中に通話の魔法具を転がす。

狼の人はかなり警戒しているようだが、俺が通話の魔法具を持つてにつこりと笑うと、こちらを睨みつけながらそれを掴んだ。

『聞こえる？』

『……聞こえる。お前は何者だ。神なのか、悪魔なのか』

おお、ちゃんと意思疎通が出来る。しかし、そうか……魔物って知的生命体だったのね。

『んー……強いて言えば、拉致犯かなあ？』

『拉致犯……だと？』

『帰りたいなら、帰してあげるよ。俺はそもそも、送還呪文について研究したいんだ。でも、それには君の多大な協力が必要だ……わかるね？ とりあえず、俺の奴隷になつて欲しいんだけど』

狼の人は、一生懸命何かを考えているようだった。

『つまり、お前は、俺達を連れて来て奴隷にしているのか？ 俺が言う事を聞くとでも？』

その言葉に、俺は頷いた。

『今から、そういう呪文を掛ける。君が協力してくれないなら、ずっと奴隷のままだけど、君が協力してくれるなら、意識は残してあげるし、一緒に元の世界に帰す研究も出来るよ。この状況下では、君が絶対的な弱者だという事を知った方が良い』

『……俺は、弟を探しに来たんだ。カルロスという』

『……そうだね、君と同じタイプの魔物に会わせてあげる位は出来るだろう。ちょうど兄貴が君そっくりの魔物を召喚して使っている…… 契約は成立と言う事で良いかな？』

そして、俺は呪文を使った。その後で、名乗り合っていない事に気づく。

まあいい。契約をするかどうかは、これからなんだし。

狼の人はゆらりと揺らいで狼の姿になった。

俺は狼を連れて、早速兄貴を探した。

「兄貴！」

「サーデイス。お前、勝手に召喚呪文を使ったのか」

バルガスが俺の使い魔を見て顔を顰める。

「うん、兄貴の召喚獣が羨ましくて、格好良い兄貴の召喚獣と同じ物が召喚出来ますようにって祈りながらやったら、上手く出来たよでも、父さんには内緒にして欲しいな。怒られたくないから」

その言葉に、バルガスは気を良くしたらしい。

「ふふん。良い心がけだ。最近。ようやくこいつを自在に操れるようになったな。見てみる」

そして、バルガスは様々な芸をさせて見せる。

「凄いよ、兄貴！」

俺が褒めると、バルガスは一層気を良くした。

「ふふん。後半年後に、父上が大会に連れて行ってくれるそうだ。まあ、初めての召喚獣だから、すぐに食い殺されて終わりだろうが、父上の名に恥じないよう、少しでも上手く操れるよう練習せねばな」

そして、しばらく話をして、使い魔を思い通りに動かす訓練をした後、魔法陣に閉じ込めた。その時、ようやく俺は使い魔が泣いている事に気付いた。

ちよつと気まずいが、次の段階に行こうか。

言う事を聞かせる呪文、召喚呪文は多彩な物があっても、その逆はない。

ここから先は、未知の世界だ。魔法陣だけは間違つて解かないようにしなくてはならない。俺は緊張しながら、洗脳を解くべく呪文を唱えた。

二十三個目の呪文で、ようやく効果が出る。

喚きまくる狼。

俺が通話の通信具をころりと転がすと、狼の人になった。

怒りを必死で抑えているのがわかる。通話の魔法具を持ったが震えていた。

『……望みはなんだ』

『あ、話聞いてくれる気になった？　もしかして、兄貴の使い魔弟さんだった？　……助けたい？　凄く難しいけど、僕なら何とかできるかもね』

ぎりつと唇を噛みしめる狼さん。

『俺の名はサーデイス。君の名は？』

『ロファスだ』

『よろしく、ロファス。とりあえず、君の世界の文字や言葉、色々な物を教えてほしいなあ。そうすれば、俺も色々教えてあげる。知りたいでしょ？　君の世界の住人を浚い続けて来たこの世界の事が知っていれば、生き残るのにちよっとは役立つかもしれないよ』

ロファスは渋々と頷いた。

——おめでとう。ここから貴方の救世が始まる。

——おめでとう。ここから世界の滅亡が始まるだろう。

男女が俺を言祝ぐ声が、聞こえた気がして、周囲を見回す。もちろん、ロファス以外に誰もいなかった。

2話 身代わり

ロファスは、苦しんでいた。

俺の世界の事を調べる度に。歴史を学ぶ度に。苦しんで、苦しんで。

でも、容赦なく選択の時は近づいてくる。

使い魔を殺し合わせる大会の時期が近づいてきているのだ。

いや、ロファスの選択は既に決まっている。

後は、その遂行にどれほどの覚悟がいるか、なのだ。

俺はロファスから必要な情報を絞り取るまで協力しないと云っているから、ロファスは俺の教育に忙しい。送還呪文の開発を手伝うのは、カルロスの為でもある。ロファスの話によると、カルロスはまだ小さいから、感情をコントロールは出来ないだろうとの話なのだ。カルロスの協力が期待できない分、ロファスのいる間に完成させた方が良いに決まっている。もちろん、一発で送還呪文が完成するなんて、百万分の一の可能性だって事はロファスも知っている。それでも、カルロスを救う為に、その僅かな可能性に賭ける為に、ロファスは俺に従うしかないのだ。

本当は、カルロスへの遺言を書く事に全ての時間を割きたいだろうに。

ちなみに遺言は俺に教えたのとはまた違う部族の言葉らしい。まあ、追及はしないさ。たった一人の弟に向けた手紙なのだから。

大会の半月前。これ以上計画を遅らせるのは無理だろう。

俺は、兄貴に無邪気を装って、問いかけた。

「ねえ、兄貴！俺、色々召喚術について学んだんだ。だから、試してみたいんだけど、兄貴も協力してよ！」

「召喚術、か……？」

「うん、ちょっとだけ操りやすくする呪文と、召喚獣を交換する呪文！俺、やっぱり兄貴の犬が欲しいんだ！」

もちろん、兄貴はそのデメリットを知っている。操りやすくするというのは、支配する領域を縮小するという事。そうすれば、支配するのも大変になる。

例えば、マリオネットを操るよりも、命じる方が遥かに楽だ。ただし、命令に必ずしも従うとは限らない。操り方に、それだけの差があるのだ。

それに、自分より強力な召喚獣は操れず、カルロスより、兄の口ファスの方が大きい。

けれど、それは兄の矜持を刺激したようだ。

同じ種で、少々大きさが違うだけなら問題がなかうと判断したものもある。

兄貴が頷き、俺と兄貴は術を使った。

召喚獣を交換する術はカルロスを助けるために必須だ。問題なのは、操りやすくする呪文だった。

支配力の無い術を使えば、口ファスの自由度は上がり、大会での生存確率は上がるだろう。しかし、そうすれば必ず兄貴がなんの術を使ったのかは調べられ、真似される。

それゆえ、他の者が使っても問題の無い範囲で、自由度があがる呪文を用意しなくてはならなかった。

ちなみに、今の兄貴が使っている呪文だと、まず間違いなく一方的に惨殺される。

出来の悪いマリオネット程度にしか動かせないのだ。

俺は、早速カルロスの洗脳を解いてやる。

カルロスはどさっと倒れて眠った。若干痩せているような気がする。まあ、初心者の方の操る召喚獣はさほど長生きしないのだけだ。餌のコントロールが難しいのである。

俺は食事と水を用意して、魔法陣に入れてやる。

兄貴がやる様な「餌」でなく、ちゃんとした食事だ。そのままにして眠ると、物音がして目覚めた。

カルロスが、必死に食事を食べていた。

「やあ、カルロス」

カルロスは、ぼけつとした顔でこちらを見る。

「誰？ …… そうだ。兄さんがいたんだ。兄さん。兄さん」

ぼんやりとカルロスは言う。洗脳した影響だろうか。頭があまり働いていないようだ。

「ロファスから、手紙を預かっている」

渡された手紙に目を通し、読めないと一言。

「ロファスが、カルロスならわかるはずだと言っていたが」

「だって、覚えたって言わないと遊ばせてくれないから。勉強したのなんて、随分前だし……あれ、なんで随分前？ ここ、どこ？」

不安げに辺りを見回し始めたカルロス。

その後、犬形態になって俺に向かって力の限り吠えはじめた。涙が、ぼろぼろと零れ、必死に魔法陣にぶつかる。

「んー……。話し合いの余地が無いなら、感情を消させてもらおうよ？」

俺ののんびりした言葉に、びくつとしたカルロス。しかし、カルロスは吠え続け、俺は再洗脳した。

「やれやれ、報われないな。ロファスは、多分お前の為に捕まったのにな」

大人しくなったカルロスを撫でる。

洗脳が続けると馬鹿になるらしいので、毎夜洗脳を解いてやった。それは、期せずしてカルロスの心を折る事になった。

どんなに吠えようと、泣き喚こうと、俺は無反応で、朝には必ず再洗脳する。

カルロスは、いつしか暴れるのをやめて、必死でロファスの手紙を眺めるようになった。

「で、今日は大会なんだけど」

びくつとカルロスの体が震える。

「お願い、お願い。兄さんに会わせて。兄さんに、兄さんに……」

「お前に人形の振りなんて出来ないだろ。お前に暴れられると俺の身の安全もやばい。まあでも、自我は奪わないようにして、体だけ操ってやるよ。これが俺に出来る精一杯だ」

そして俺はカルロスを連れて、使い魔の大会に連れて行つた。

ロファスは、他の子供が操る召喚獣よりは、断然よく動いた。父上も、兄貴を見て満足そうに頷いている。

大会で二回戦を勝ち抜き、三回戦目で辞退。まあ、妥当な所だろう。

二回戦目は強敵で、あと一步で殺されるという所で、兄貴が駄目

もとで必殺技いけー！　と言ったら、ロファスが火球を吐いて相手を倒したのだ。これは、完全に操る方式では絶対に出来ない事である。

ただし、ロファスはぼろ雑巾のようになった。

普通だったら、止めを刺して次の召喚獣を呼ぶ所だ。

けれど、ロファスはいいい人質になる。

「兄貴！　なあ兄貴、ロファス、殺さないでくれよ。俺、兄貴とお揃いの召喚獣でいたい！」

「む……。ま、父上も俺が召喚できる召喚獣の中では上の方だといっていたしな」

本当は、兄貴よりもワンランク上だと、二人とも知っていた。

二回戦目の勝利では、非常に褒められたし、他の召喚獣では同じ手は使えないかもしれない。特殊攻撃を知る事は非常に珍しく発見すれば報奨金も得られる。次に同じ種類の召喚獣を手に入れた時に、同じ技を使わせる事が可能になるかもしれないからだ。

兄貴は深く頷き、ロファスを治療する事にした。

父上に習いながら、魔力を多く分け与え、体をコントロールして治癒力をあげる。

その夜、カルロスは暴れる事無く、腕を噛んですすり泣いていた。そして、翌日から協力を申し出て来てくれた。

どこまで信じていいかはわからないが、送還呪文の研究を続けま
すかね。

送還呪文の研究に必要なのは、全部で三つ。

座標特定。

送還呪文。

そして、任意の魔物の召喚である。

何故なら、送還出来ても、それが成功したかどうかかわからなくて

は意味が無いからだ。

難しいが、座標特定は元いた場所に帰すという方向で頑張ってみるしかない。

俺の魂が、元の世界の座標を覚えている事に賭ける！

…… 本当はあんまり自信ない。

その日、俺は夢を見た。

しゃがみ込んでいるカルロス。

カルロスは泣く。

カルロスは泣く。

カルロスは泣く。

その両肩に、手は伸ばされる。

美しき女性 は 右肩に手を置いて言った。

「泣かないで、幼き子よ。神子が貴方を救うでしょう。その時の為、今は耐えるのです。大丈夫。努力は必ず報われる」

美しき男性が、左肩に手を置いて言った。

「泣くな、弱く愚かな子よ。神子により、汝の復讐はなされるであろう。今は爪を研いでいるがいい。お前は、愚かであるという罪を知った。もう間違えてはいけない。望みを果たしたいならば」

カルロスは涙を拭き、立ちあがって真っ直ぐに俺を見た。

なぜだろう。

なぜだろう。

俺が叫んでいるのは。

「こんなつもりじゃなかった！」

ただ愚かだっただけで——けれど愚かさは、それだけで罪なのだ。
カルロスの手が、縋るように伸ばされた手が、俺へと届く。
？

2話 身代わり（後書き）

ロファス、悩んだ末に生かしてしまいました。

本当は殺した方がいいのですが。生かしておいてもどうするよ……。惨い話書くの難しいです><

閑話 愚かさの代償（魔物サイド）

「勇者になるんだ！」

——それは子供の愚かな夢。

「そうして、困った人達を助けるんだ！」

——それは、都合の良過ぎる伝説。

尻尾を振って、夢を語る子狼。微笑ましい姿。

愚かと言うより無邪気なその夢は、罪ではないはずだった。
その世界が、魔物の世界でなければ。

「カルロス！ 勉強はもうすんだのか？」

「子供扱いしないでよ！ バリアス語はもうばっちりだよ！」

息を吐くように嘘をついて、カルロスは飛び出した。

走って、走って、友達の集まる場所へと駆けて行った。

ロファスは将来有望な、強く賢い自慢の兄だ。けれど、カルロスにまでそれを求めてくるのはうっとおしく思っていた。

自分は、勇者になるのだとカルロスは考えていた。

弱く、愚かであれば勇者のような大役がこなせるはずはないのだけれど、カルロスはそんな事思いつきもしなかった。

自分はいつか異世界に行つて、勇者として戦い、お姫様と結婚するのだ。

呆れるほど無邪気な夢。カルロスも、半分くらいはその夢を愚かだと知っていた。

けれど、友達だつて勇者になれたのだ。僕にだつて慣れるに違いない。

魔物の世界には、伝説があつた。

ある時は鏡。ある時は星の絵。そんな不思議な物が現れて、人々を誘つと。

それは自分の意志で避ける事が出来る物も、避けられないものもあつた。

共通しているのは、帰つてきた者がいない事。

ある者は言つた。

――彼らは、神がお召しになつたのだ。

ある者は言つた。

――彼らは、悪魔に連れ去られたのだ。

ある者は言つた。

――彼らは、死んだのだ。

ある者は言つた。

――きつと勇者になつたのさ。

行つてしまった愛する者が幸せでいる事を人々は望んだ。

自然、神に召されたとか、勇者になつたとか、そんな都合の良い話を信じたがつた。

都合の良い話が蔓延するから、子供達は不思議な「扉」に憧れた。カルロスもまた、典型的な夢見る子供であつた。

そして、カルロスの前に鏡が現れた時、カルロスは夢だろうかと思つた。

迷つた事は認めよう。戻ってくる事が出来た者はいないのだから。けれど、カルロスはこんなチャンス、二度とないのも確かだと思つた。

だから、カルロスは走つた。

「駄目だ、カルロス！！」

ロファスが悲鳴のような声をあげる。不思議だった。そんなに心配しなくても、大丈夫なのに。僕は勇者だから、きつと戻って来るよ。戻れた人なんて一人もないのに、根拠なくそう思う。

鏡をくぐってまず感じたのは、魂を千切る様な痛みと苦しみだった。カルロスは、そうして正気を失った。

次に目覚めた時、カルロスは呆然としていた。ただただ、頭が働かなかった。

次に、目の前の良い匂いに気がついて、必死に齧り付いた。まともな食事を、久々に食べた気がした。美味しかった。

夢中で食べていると、声が聞こえた。

「やあ、カルロス」

まだ頭が働かない。けれど、子供に話しかけられたことで、カルロスは頭を使い始めた。

「誰？ …… そうだ。兄さんがいたんだ。兄さん。兄さん」

考えてみようとした所で、何故かいの一番に浮かんだのは兄のロファスであった。兄が、獣形でこちらを見ていた。それに、暗闇だったカルロスの心は、確かに揺れたのだ。何故、兄を見たことでそうなったのか、カルロスにはわからない。人形でいた頃の記憶は、言葉の違う者達の会話は、カルロスの心に残らない。一年経ってなお、この世界の言葉をカルロスは知らない。

「ロファスから、手紙を預かっている」

渡された手紙に眉を顰める。

「読めないよ」

その言葉を吐いた時、それは何かとてつもなく悪い事のような気がした。

「ロファスが、カルロスならわかるはずだと言っていたが」

ため息を吐いて少年が言うので、カルロスがむっとした。若干、恥ずかしくもあった。

「だって、覚えてたって言わないと遊ばせてくれないから。勉強したのなんて、随分前だし……あれ、なんで随分前？　ここ、どこ？」

カルロスは、ようやく必死になって思いだし始めた。そして、心が奪われた事、兄が同じ目にあっている事を思いだして、はっとして犬形態になった。

混乱と恐怖。涙がぼろぼろと零れる。

友達を見た。友達を見たんだ。

それは、カルロスが羨んでいた、一年前に「勇者様になった」友達。

闘技場のような場所で、マリオネットみたいな無様な戦い方をさせられ、食い殺された。

魔物は決して、共食いをしなかった。なのに、その魔物は友達を「食べさせられた」。

「んー……。話し合いの余地が無いなら、感情を消させてもらおうよ？」

のんびりした言葉は、だから恐怖を呼び起こした。相手にとって、それは日常的で、全く問題の無い事だと思い知らされて、怖かった。いよいよ激しく吠えるカルロスは、すぐに心を消された。

「やれやれ、報われないな。ロファスは、多分お前の為に捕まったのにな」

大人しくなったカルロスを撫でる、名前も知らない少年。

その言葉は、次に正気を取り戻したカルロスを絶叫させた。吠える。泣き喚く。暴れる。それはあまりに無意味だった。

涙を拭って、手紙を見つめる。

「読めない、読めないよ、兄さん……」

何故あの時、バツチリだよなんて言ってしまったのだろう。兄さんは、それを信じてくれたのに。元から苦手だったバリアス語。一年経った今、その知識はすっぽりと抜け落ちていた。どんなに必死に凝視しても、頭を働かせようと努力しても、読めない物は読めない。今、教師が現れたら、カルロスは必死に勉強しただろう。喜んで、遊ぶのを諦めて、すらすらと読めるように努力しただろう。今、教師が現れたら……。

「で、今日は大会なんだけど」

サーデイスの言葉に、びくつとカルロスの体が震える。名前や大会の事は聞いていた。どうなるかは、自分の目で見て知っていた。ロファスは、将来有望な兄は、自分の為に命を落とすのだ。

「お願い、お願い。兄さんに会わせて。兄さんに、兄さんに……」

せめて、一言だけでも会話が出来たら。ごめんなさいって言えたら。お願い。お願いします。真面目に生きるから。真面目に生きるから。

そんな願い、今更通るはずが無かった。好奇心と不真面目の代償は、既に支払われてしまったのだ。兄の命で。

「お前に人形の振りなんて出来ないだろ。お前に暴れられると俺の身の安全もやばい。まあでも、自我は奪わないようにして、体だけ操ってやるよ。これが俺に出来る精一杯だ」

向かった大会。

兄の無様な姿に、傷つけられていく体に、カルロスは心の中で悲鳴を上げた。

けれど、どんなに心中で喚いても体は動かない。

兄は、もっと優雅に戦うはずだった。

産まれて一か月の幼獣だって、今の兄よりマシに戦うだろう。

それでも兄は、他の子供が操る召喚獣よりは、断然よく動いた。

一回戦。小さな狐族を、兄は食い殺した。

まだ、あんなに小さい狐族を、兄は骨一つ残さず食らった。

嘔吐したくともできない。目を逸らしたくともできない。体の支配権は、サーデイスにある。

二回戦目は強敵で、あと一步で殺されるという所で、サーデイスの兄バルガスが何か叫んだら、ロファスが火球を吐いて相手を倒した。そのまま、ロファスが倒れる。

駆けよいたかった。出来なかった。

サーデイスとバルガスが何か話している。カルロスをちらちら見ながら。

それが、カルロスやロファスに関係する事は明らかだった。何を喋っているか知りたい。

出来ない。

そして、例え何を言っているかわかっていても、その残酷な運命を変える力をカルロスは持たないのだ。

自由を取り戻したら、まず叫んでしまうかと思った。

けれど、悲しみは、怒りは、痛みは、それすら通り越した。ただ、「何か」に目をつけられないように、腕を噛んで悲鳴を押し殺し、静かに泣いた。何かが何かなんて、カルロスにもわからなかった。ただ怖かった。

サーデイスは、協力するなら、ロファスについて多少の便宜は図ってあげられる、大会の時も止めを刺して次の魔物を召喚する事を止めたあげたと言った。

あまりの非道に、悪魔とすら思った。同じ生き物とは思えなかったのだ。

泣いて、泣いて、泣いて、何かしなくてはと思った。だから、サーデイスに話しかける。

サーデイスは笑顔でそれを了承した。やっぱりこの人は悪魔なんだと、その笑みを見て思った。

その夜、僕は夢を見た。

真っ暗闇で、出口が無いかのように思われたそこで、しゃがみ込んで泣いていると、肩に手を置かれた。

それは女の人だった。

「泣かないで、幼き子よ。神子が貴方を救うでしょう。その時の為、今は耐えるのです。大丈夫。努力は必ず報われる」

それは男の人だった。

「泣くな、弱く愚かな子よ。神子により、汝の復讐はなされるであろう。今は爪を研いでいるがいい。お前は、愚かであるという罪を知った。もう間違えてはいけない。望みを果たしたいならば」

本当にそうだ。愚かさは罪だ。もう、間違えてはいけないんだ。

手紙が読めないなら、手紙を父さんに届けないといけない。死んだ母さんに似た兄さんを溺愛していた父さん。自慢の息子だと兄さんを自慢していた父さん。父さんに、兄さんを返さなきゃ。それが無理なら、この手紙だけでも。なにより、兄さん僕に遺してくれた手紙を読みたい。読まなきゃいけないという責任がある。

努力は必ず報われる。そのはずだったんだ。僕がきちんと努力していれば、少なくとも手紙は読めた。もう、後悔するような事なんてしない。

カルロスは涙を拭き、立ちあがって真っ直ぐに「神子」を見た。縋るように。捕えるように。

顔すら見えない、人としての輪郭だけのそれに、手を伸ばした。

——神様、僕を助けて下さい。

——悪魔、僕は願いが叶うなら僕はなんだってする。

——だから、神子よ、僕に力を

3話 絶望と希望

俺は悲鳴を上げて飛び起きる。

何か、すごく怖い夢を見ていた気がする。

荒くなった息を何とか整えると、起き上がった。

送還の術、そろそろ第一回目をためしてみたい。

カルロスを起こして、告げる。

「今日、送還の術を試してみたいと思う。その前に、カルロス。君に毒を飲んでもらう」

「毒……」

俺が薬をちゃぽりと目の前で揺らして見せると、カルロスは茫洋とした目で頷いた。

「仕方ないだろう？ 同時に二匹の使い魔をもてない。俺が一番恐れるのは、送還呪文を成功させ、かつ契約が維持された場合だ。安心しろ、再召喚が成功できたら解毒してやる」

「時間は」

真剣な言葉で聞いてくるカルロス。それに、こともなげに俺は答えた。

「一ヶ月、与えてやるよ」

カルロスは、ぎゅっと拳を握り締めた。
そして、結局は、また頷いた。

カルロスに選択の余地はない。一ヶ月間の時間を上げただけ、慈悲深いというべきだろう。

そして、地下に描かれた大きな魔方阵の中心にカルロスを立たせ、俺は呪文を唱えた。

魔方阵が光った。そして、カルロスの姿は消えていた。

光の奔流の中、カルロスの持っていた手紙がぼろぼろに破け、カルロス自身も傷ついていく。命を落とさんとした時、ふっとカルロスの体を包むものがある。

——大丈夫。貴方は、私が守りましょう。

暖かい光に包まれ、カルロスは高き空中に出現する。

——案ずるな、運命がそなたを導くであろう。

上空を通りがかるは、鷲型の魔物。彼は落下する影に気づき、人型に変じてカルロスを救った。

「おい、坊や。お前、どうしたんだ？　こんな空中から現れるなんて、転移の術の失敗か、逃げてきたのか？　ま、賢狼族のところに連れて行けばはつきりするか」

そして、鷲型の魔物はカルロスを抱いて空を滑空する。目指す先は、賢狼族の里だ。

一時間ほど飛空して、賢狼族の里に着く。

ぼろぼろのカルロスを見て、騒ぎながらも集まりだした。

「よお。なんか落ちてきたから、連れて来たぜ。あんたのところの餓鬼だろ」

長老が歩み寄ってきて、カルロスの顔を撫でる。

「信じがたい……。この子はカルロスだ。神がお召しになった子だ。早く治療を！ バーガスを呼べ！」

にわかに騒がしくなる村。

「神に召された」者はカルロスとロファスの兄弟だけではない。不審な行方不明者の中で、何人が神に召されたのか見当もつかない。中でも、子を二人とも神に召されてしまつて意気消沈していたバーガスは、この一人が戻つたと聞いて転がるようにして走ってきた。

「私の子が、私の子が戻つたと！？ カルロス、カルロス！」

カルロスはぐったりとして答えない。

即座に治療が行われ、また、神に召された子の話を聞こうと数多の一族の者が集まり、治療に協力した。

そして、一週間後。カルロスは起きた。

「カルロス！ カルロス！ ロファスはどうした！？」

一番に掛けられた声に、カルロスは表情を歪ませた。

カルロスは、手紙を守れなかった右手を

「僕は、どれくらい寝ていた？」

「カルロス！ ロファスは」

長がそれを抑え、一週間だと答える。

「それなら……残り時間はあと一週間、失敗すればあと三週間、か長、僕は一週間で、戻らなくてはなりません。一ヶ月で死ぬ毒を摂取しているからです。その前に、僕は伝えないといけない」

「……言うがよい」

「あの扉は、異世界への誘い……。心を奪い、奴隷にするための術です。兄さんは僕の身代わりとなって奴隷となり、僕もまた、戻らねばなりません。だから、絶対に扉を通ってはいけない。それと、紙を」

カルロスは、ぎゅっと拳を握った。カルロスは、手紙をそっくりそのまま書くことができるかどうか自信がなかった。しかし、やらねばならない。ロファスの遺言を、父へと伝えるために。

カルロスは、必死に思い出しながら書いた。いや、描いた。文字など、読めなければ複雑で意味のない模様でしかない。それを再現できるかどうか。カルロスは必死だった。

「これは……すごく下手だが……」

「兄さんの遺言です。ただ、僕、勉強サボってて、読めなくて……形だけ覚ええました」

「そんな、ロファスは……！」

数十枚に及ぶページ。カルロスが覚えていられたのは、そのうちのページだけ。

そこには、カルロスと父への愛情と、絶対に同じような人を増や

してはならないという祈りが綴られていた。

そして、緊急会議が開かれた。

全ての部族の長が、集められた。

確実なのは、カルロスの前に、再度召還の扉が現れるということのみ。

けれど、カルロスがぼつぽつと話し始めた惨状に、長達は結託した。

そして、カルロスの前に、狐族の美しい女性が現れた。

「貴方の毒は、解毒する。そして、私が代わりに召還されるわ」

「これは、僕の役目なんです。サーデイスの実験体となって、より多くの情報を得ないと……」

「私の子かもしれない」

「え？」

「貴方の兄が食わされた狐族の魔物は、私の子かもしれないの。ロファスさんの事は、わかってる。操られていたのよね。だから、私はロファスさんを守る。下手にサーデイスを害して警戒心と呼ぶこともしない」

そういつつも、狐族の女性の手はきつく握られ、振るえ、血が流れていた。

「私は、異世界とやら全部に復讐してみせる。その為だったらどんな事だって耐えられる」

カルロスの目からは涙がこぼれていた。

繰り返された悲しみと、繰り返される悲しみを思つての涙だった。そして一週間後、カルロスの前に魔方陣の刻まれた鏡が現れる。カルロスは、それを見て震えた。それを父が肩に手をやって宥め、狐族の女性が鑑に触れる。

そして、召還はなされた。

俺は召還された者を見て、眉をしかめた。違うじゃないか。そして、テレパシー用の術具を使う。

「私はキアラ。サーデイス、初めまして」

「カルロスの知り合いなのか？ 送還呪文は完成したのか？」

「一時間治療が遅れれば危なかったそうよ。傷だらけだった」

それさえ聞ければいいんだ。

「そうか、安定しなかったんだな。ここら辺は練習あるのみか。で、お前は？」

「どうしても、この世界に来てみたかったの。貴方は実験さえできればいいんですよ？ 私、頭のよさには自信があるの。手伝うから、いろいろ教えてくれるかしら？」

「……カルロスから聞いてないのか？」

「あら？ 少しくらいの危険は、冒険にはつき物よ。それに、貴方は洗脳しないんでしょう？」

そう笑ってみせるキアラは、とても魅力的だった。
だから、俺はその提案を受け入れた。
それが、破滅の始まりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7113u/>

それはしてはいけない事だったんだよ

2011年10月9日16時38分発行